

VIII. 業績評価

第六期中期目標におけるモニタリング指標の一つとして、創出された研究成果および実施した学術ネットワーク活動について、アジア経済研究所業績評価委員会による評価を実施し、その評価結果は法人の自己評価にも活用された。

創出された研究成果についての評価においては、2024年度に刊行または発表した研究成果のうちの10件を対象として専門委員20名に委嘱し、評価を実施した。評価結果は、5段階評価の総合平均で4.95であった。

アジア経済研究所が2024年度に刊行または発表した研究成果のうち、評価軸や社会的ニーズなどの観点から評価できるものとして、「朝鮮民主主義人民共和国の党軍関係」が最も多くの委員から挙げられた。その理由として、「圧倒的な研究成果。新規性、独自性、社会的ニーズ、どの面からも高く評価できる」、「30年以上、漏れこぼれるわずかな情報を拾い集め、積み上げて書き上げられた本書は、日本のみならず世界的にも類がないのではないか」。

(略) アジ研というインフラが生み出した研究業績である。本書の内容は(略) 資料的な価値が非常に高い」、「北朝鮮の実態について極めて重要な情報を提供している」などのコメントを得た。

「サステナブル認証のルール形成—グローバル・サプライチェーンをめぐる協力と競争—」については、「今後の日本経済、世界経済の動向を左右する極めて重要な研究テーマについて、先駆的な本格研究である」、「『サステナブル認証』の制度概要、成立経緯、実態についてバランスよく書かれていて、教育と研究の知的インフラを形成するものとなることはまちがいない」、「学術的にも実務的にもニーズが高い問題を様々な研究領域の専門家が参画することで学際的に分析されており、その優れた研究成果は高く評価できる」との理由から、多くの委員から高い評価を得た。

また、「現地社会に密着した調査から得られたデータによってランダム化比較試験を行い、説得力のある結論を導き出している」、「アカデミックな意義にとどまらず、社会的意義も高いと考える。(略) パキスタンにとどまらず、途上国、また先進国の一端の保守的な社会の変化を促す上でも重要な示唆を与える研究である」との理由から "Labor Market Information and Parental Attitudes toward Women Working Outside the Home: Experimental Evidence from Rural Pakistan" が、そして「理論的にも実証的にも最新の研究を踏まえた優れた業績である」、「投票行動と抗議運動との関係を政治学において研究するための新たな視座を提供したことに対して高く評価したい」などの理由から "The Drowning-Out Effect: Voter Turnout and Protests" も、それぞれ複数の委員から高い評価を得た。

89件の研究課題のうち、新規性、独自性、期待される成果や社会的なニーズの高さなどの

観点から実施する意義を評価できるものとして、①「米中貿易紛争の経済的影響」、②「経済地理シミュレーションモデルに基づく研究」、③「構造再編を迎えるグローバル・バリューチェーンV」、④「アジア諸国の動向分析」が多くの委員から選ばれた。委員からはそれぞれ、「中国の対外直接投資や東南アジアに対する経済パワーの拡大のメカニズムを分析したものであり、米中貿易紛争という日本やアジア経済にとって極めて重要な課題に対し、国際的なチーム構成で挑んでいる（①）」「トランプ米政権の関税政策に対応した予測は世界的にも最も早くかつ精度の高いものの1つで、社会的意義が極めて大きい。学術的にも（略）他の一般的なモデルに比べて優れたものとなっていることも高く評価したい。（②）」「現在世界で起こっている構造再編の実態を把握する上で非常に有用である。（略）アジア経済研究所がグローバル・バリューチェーン研究の日本における拠点、また世界におけるこの研究のネットワークの結節点として機能していることをうかがわせる（③）」「本邦の専門家、政策立案者、メディア、アジアに関心のある一般市民など様々な読者にとって非常に有用な情報を継続的に提供しており、社会的ニーズも極めて高い。（略）日本社会におけるアジア理解へ多大な貢献をなしている点でその意義を高く評価すべき（④）」などのコメントを得た。

研究活動全般に対する評価としては、「研究テーマの深みと広がりにおいて、世界的に類のない研究活動を推進していることは明らかである」、「マクロな視点とミクロな視点、理論と実証、先端的な研究と基礎的な研究のバランスが全体としてよく取れている」、「実務的に必要とされる研究がタイムリーに行われ、成果を収めているものも少なくない」、「特にIDE-GSMを用いたシミュレーションおよびサプライチェーン脆弱性指標のOECD公式統計への採用・公開は、アジア経済研究所ならではの、社会に対する大きな貢献である」、「英文ジャーナルに掲載される論文数が増加しただけでなく、Q1、Q2に分類される学術誌に投稿される比率が伸び、海外からの論文のアクセス数も増加しており、質の高い研究成果が国内外へ発信されていることも評価したい」など、アジ研が幅広い研究テーマをバランスよく実施し、社会に大きく貢献する質的に優れた成果をあげていると高く評価するコメントを得た。特に査読付き英文ジャーナルへの掲載では、前年度に比べて質・量ともに増加し、執筆者の偏りにも大きな改善が見られたと評価するコメントもあった。

また、「学術書や研究論文だけでなく、IDE Discussion Papers、Policy Brief、Research Columns、IDEスクエアなどの媒体によって新たなアイディアや現地情報などが発信されており、専門家や実務家だけでなく、一般の方々にも理解しやすい途上国情報が提供されていることも評価に値する」、「研究成果の多くがウェブ上でアクセスできること、また多くのオープンアクセスになっていることについても高く評価している。（略）IDEスクエアも社会的ニーズに合致した形で質の高い情報発信をしている大変有意義な活動であると評価する」など、成果の発信を評価するコメントも得られた。研究成果に基づく政策提言であるPolicy Briefについては、前年度に比べて大幅に増加したことを見るとともに、「学術的な成果

を基にしていることは、evidence-based policy making (EBPM) が重視されている現在、非常に大きな価値を持つ」とのコメントもあった。

この他、大学では研究者個人に任されているアウトリーチ活動を組織的にサポートしながら実施していることがアジ研の強みであるとのコメントもみられた。

2024年度に実施した学術ネットワーク活動のうち、特に意義を評価できるものとして、日本学術振興会の「研究拠点形成事業（B.アジア・アフリカ学術基盤形成型）」に採択されたことが最も多くの委員から挙げられた。その理由として、「本格的な国際研究交流拠点の形成としても、アジ研のさらなる機能強化の大きなステップとなりうる」、「グローバルサウス諸国との研究ネットワークを拡大するという意味で、アジ研ならではのものであり、（略）日本とグローバルサウスとの長期的な知的連携を深化させることを大いに期待したい」などの高く評価するコメントを得た。

この他、TICAD9に向けた知的共創の取組みが、アフリカ地域の研究のハブであるアジ研だからこそ実現できたことであるとして、また、ERIAおよび東アジア16カ国の研究機関との関係を深化させる取組みが東アジア・東南アジアの研究機関との交流を着実に深化させているとして、それぞれ多くの委員から高く評価された。

多様なステークホルダーが連携した学術ネットワークが拡大しているとの理由などからグローバルサウス諸国の社会課題等をテーマに開催した学術交流イベントを評価する意見も複数の委員から寄せられた。また、アジア経済研究所図書館について、「文献だけでなく人材的に素晴らしいリソースを持っている。世界で唯一と言ってよい」、「文字通り学術情報プラットフォームの重要な担い手となっている」と評価するコメントが得られた。

学術ネットワーク活動全般に対する評価としては、「総合的に見て、多方面において学術ネットワーク活動が実施されており、国際的な研究のハブ機能および学術情報プラットフォームとしての機能を十分に発揮した」と評価するコメントや、「海外の研究機関・行政機関・国際機関との連携も進んでいる」、「実務と学術領域を架橋した取り組みであり、アジ研ならではの独自性や専門性が活かされており（略）特筆に値する」など、多くの学術交流イベントによって相互連携が進展していることを評価するコメントが複数の委員から得られた。具体的な活動としては、「ビジネスと人権」にかかる在外公館および国際機関等との共同セミナーや、メコンダイアログに関する国際ワークショップが挙げられた。また、BRINやアディスアベバ大学とのMOUに関しては、具体的な共同研究計画に発展させたことや、共同研究による論文に結びついたこと、さらには研究員の受け入れにつながったことを評価するコメントもあった。

研究者としてのプレゼンスを示すために国際会議や学会での発表は特に重要であり、2024年度に合計48件の登壇があったことを評価する一方で、より多くの学会発表があってもよいかもしれないとのコメントもあった。また、海外研究員制度による研究対象国への長

期派遣を通じて所属する研究員が現地との人的ネットワークを形成することは、アジア経済研究所の国際的な研究ネットワークにおけるプレゼンス拡大にも繋がるものとして重要な指摘もあった。また、学術情報プラットフォーム機能の発揮に着目した評価としては、資料や出版物のデータベース化が確実に進んでいるとのコメントの他、ライブラリアンが発信する情報の提供やデジタル・アーカイブ化をアジ研の基幹活動の一つとして継続することを望む意見や、アジ研図書館がアジア関連情報の収集方法に関する研修や出張講座を実施したことを評価するコメントも得られた。

今後への期待としては、アジ研が国内外の学術ネットワークのハブとして機能するためには、客員研究員の受入をより一層積極的に進めていく必要があるという趣旨のコメントの他、現地語で学術交流するべきであるとの意見、さらには、図書館が情報・統計を調べる研修や出張講座を行っていることについて、より広く活用してもらうためにウェブサイトや動画でも情報提供することを提案するコメントもあった。